

タッカー・カールソン談話：プーチンがバイデンを滑稽に見せる：

ウクライナ侵攻大騒ぎの分析

<https://www.infowars.com/posts/tucker-carlson-putin-made-biden-look-ridiculous-over-cries-of-ukrainian-invasion/>

February 18, 2022

⇒「これは明らかに、国務省とメディアを通じて入ってきた、何らかの情報作戦である」と、カールソンは言った。

Tucker Carlson Tonight の木曜夜放送で、この Fox のホストは、ロシア-ウクライナの争いと、いかにバイデン政府が、予想した通りに、これを台無しにしたかを説明している。

バイデン政府が、2月16日は、ロシアがウクライナを侵略する日だと宣言した後、その日がやってきて何も起こらなかったのに、カールソンは、戦争屋が何週間も工作したのに、何とこの政府は「滑稽」であることかを指摘した。

「訳者 Greatchain 注釈」

以下に翻訳するカールソンの的確なバイデンの説明は、傾聴すべきである。バイデンにはロシアとプーチンに対する、特別な思い込みがあって、これが一種の信仰のようになっている（露骨極まる「プーチン人殺し発言」を見よ）。これは彼を用いるグローバリストにとっては、好都合であって、彼がいかに痴呆症状をさらしても、彼を手放せない理由はそこにあると思われる。これはもちろんバイデンだけでなく、ワシントン全体に刷り込まれた思い込みだが、バイデンには特別の利用価値があるのであろう。

これは「滑稽」でなければならない。昨晚、NHK テレビでこれをやっていたが、さすがにこれは滑稽だった。バイデンを恭しく扱うことが間違いであることを、視聴者に分からせなければならない。ロシア側はこれをほとんど楽しんでいる。アメリカには何か都合の悪いことが起こると「ロシアがやった！」と言い立てることが伝統になっているから、数年前のウクライナ危機のとき（2014?）、ロシア側が玩具の戦車をずらりと並べて、これを撮影し、「ロシアが攻めてきたゾー！」と書いたことがある。こんな面白いネタがあるにもかかわらず、わがメディアは、もちろん報道しなかった。わがメディアは、

バイデン政府と同じであり、昔からロシアを馬鹿にするのが、グローバリストに対する礼節のようになっている。

今回はもちろん、ロシアに余裕があるわけではない。グローバリストは地球破壊のための手段を選ばないと、考えられるからである。にもかかわらず、この滑稽さは消えるものではない。タッカー・カールソンの口調にそれが現れている。しかし、とりあえず「2月16日危機」は去った。それだけでも胸を撫でおろすべきである。芭蕉の句に「あら何ともなや昨日は過ぎて河豚と汁」というのが、「あら何ともなや十六夜は過ぎ屁とタンク」と言っておこう。

カールソン談話トランスクリプト：

カールソン：ドラマ仕立てだが、まあ、ここから学ぶことがないわけではない。去年からずっと我々が学んできた一つの話は、ロシアだった。どうしてかというと、ロシアこそ、ジョー・バイデンのナンバーワンの、お気に入りの話題だからだ。

バイデンはロシアについてなら、止めどもなく語るだろう。ただ、彼については一度に4分までということで、バイデンの場合にも、この妨害演説の制限時間がある。あなたは自分で考えたことがあるかもしれないが、ジョー・バイデンは、ロシアについて語ることを、いったい、いつ止めるのだろうか？ まあ現実問題として、彼は、考えの繋がりを今にも失いそうに見えるのだが、心配ご無用、彼はすぐまた戻ってくるのだ。

ロシアはジョー・バイデンにとって、非常に居心地のいいトピックだ。彼はたとえば、インフレとか、犯罪とか、フェンタニルによる死とか、ハイチの人口の半分以上が水漏れボートでフロリダにやってきた話とかよりも、ロシアのことを嬉々として話すのだ。この話題は、あなたはこの国に住んでいるので興味があるかもしれないが、バイデンにとっては全く違うのだ。

見かけは違うが、バイデンは実は、この国には住んでいない。彼の頭の中では、ジョー・バイデンは、アゾフ海あたりに漂っていて、薬物スーパーヒーローのように、南東ウクライナあたりに舞い降り、彼の子分、つまりウクライナ人たちが、ちゃんとやっているかを確かめにくる。ジョー・バイデンはそのように、彼らの保護者なのだ。

しかし彼はまた、学者でもあり教師でもある。彼は、彼が結婚しているドクターのように証明書はもった教師ではない。ジョーは、デラウェアの地方大学へ行って、多様な研究の学位は取らなかった。彼はただの一市民である。しかしジョー・バイデンは、頑張って講義することはできる。

もしあなたが間違っ、今学期、彼の「ロシアが悪い」というクラスに登録しても、がっかりすることがない。バイデン教授は、それが面白くないことを知っているのだ。

そこで、ここまで我々は何を学んだのか？ それは一から十まで「ロシアが悪い」ということである。それがこの講義の名前だ。実はそれがシラバスの全体だ。それが、何か月もかけた講義から出てくる唯一の事実かもしれない。ロシアが悪い。それを覚えておけば試験は満点だ。

ところではっきりさせておきたいことは、我々はここでロシアについて話している。ソ連についてではない。そこには違いがあって、ジョー・バイデンは、その違いが何であるかを知るだけの時間は生きてきた。彼はそれを直に見てきた。

ソ連邦は平和を求めている。そのことをジョー・バイデンは、70年代と80年代に繰り返して我々に話した。ロシアはそれとは反対に、ひたすら戦争を求めている。ロシア人は戦争好きな民族だ、それはもって生まれたものだ。ロシア人は血に飢えている。彼らは小さな脳しか持っていない。彼らの息はニシンの匂いがする。彼らはしばしば、髭を剃った後でも、家庭でクリーニングした後でも、いつでも酔っぱらっている。

日曜日の朝、善良な人々が、まだ家族と一緒に家で眠っているときに、平均的なロシア人は、まだ暗い街路に潜んで隠れており、血走った眼で睨みながら、他人の民主主義をひっくり返すか、平和を愛する隣人を征服しようとしている。これがロシア人というもので、それが彼らのやることだ。

しかしもしロシアについて、絶対に知っていなければならぬことが、ひとつあるとして、あなたがこの世界を探索しているとしたら、そのひとつとは、2022年2月16日に、ウラジミール・プーチンが、我々の世界で最も親密な同盟者、ウクライナを、征服しようとしていることなのだ。だからそれを書き留めておきなさい、2022年2月16日にウクライナ侵略が始まる。まさにその日に始まる。

ジョー・バイデンはそのことについて、非常に明確だった。情報局もそうであり、もちろん、ニュースメディアの速記者もそうだった。Politicoが言ったように「ロシアは2月16日早々に、ウクライナに対して、物理的な攻撃を開始する、とかなりの数の米高官は確認した。」物理的攻撃だ。

しかしこれは、あなたがニューヨークの地下道で経験するような、典型的な物理的攻撃ではないだろう。POLITICOによれば、この物理的攻撃は、「一連のミサイル攻撃とサイバ

一攻撃が、先行するものでありうる。」だから、これはギャングのメンバーでなく、ロシア人なのだ。

Daily Mail は POLITICO の報告を確認して、「プーチンは水曜日にウクライナ侵略を決定、英国人と米国人には、退去を要請」と見出しを書いた。

同じ日に、ロンドンの The Mirror が、我々に通知して、ウラジミール・プーチンの計画文書を見たと言い、「ウクライナ民主主義を嗅ぎ出せ作戦」が、すでに動き出している、「ロシアのウクライナ侵略が、明日、午前3時に、ミサイルと戦車攻撃と共に、セットされている」と言った。

そこで、2022年2月16日が、ウクライナで音楽が死ぬ日として確定した。あらゆる者たちがそれを知った。しかし不気味なことに、誰も、ウクライナの大統領にそれを言うことを思いつかなかった。彼はバイデン国務省の忠実な傀儡のはずで、そのニュースは聞いているはずだった。しかし間違った。彼は聞いていなかった。彼はこれを聞いて当惑した。

彼はこう言った、「どうやら2月16日が、我々の攻撃の日になるようだ。我々はこれを結束の日にしよう。関連する法令はすでに署名されている。この日に我々は国旗を掲げ、青と黄のリボンを着け、世界に対して我々の結束を示そう。」こう言ったのはゼレンスキー大統領だった。

ところで忘れないでほしい。バイデン政府の傀儡であるだけでなく、ウクライナのゼレンスキー大統領はまた、ある種の低級なコミックを演じていた。だから彼はからかっていたのだ。それはジョークだった。

しかしアメリカのニュースメディアには、ジョークというものはない。ユーモアはもう数年も前から禁じられている。実際、この点であなたは、アメリカのテレビよりも、ロシアのニュース報道でジョークを聞くことの方が多いだろう。これは考えてみれば、かなり驚くべきことだ。事態は変わってきているのだ。

.....(数十行略).....

カールソン：.....ウラジミール・プーチンだって？ この者たちはこれが冗談だとわからなかった。そこで我々は、突然、東欧の人々からユーモアの講義をしてもらうという、あまりうれしくない立場に立たされた。ちょっと考えてみるがよい。

ゼレンスキーのスタッフは、実は、彼はからかっているのだ、と説明する声明を出した。そこであるニュースメディアが、彼らの報告をアップデートしなければならなかったが、彼らは明らかに、ゼレンスキーの言葉に戸惑っていた。「ウクライナの指導者は、ロシアの侵略について、困惑させる冗談を言っている」と、Harrumphed ニューヨーク・マガジンは言った。

しかし、ここで最もおかしいことは、侵略などなかったことである。2022年2月16日は昨日だった。何も起こらなかった。ウラジミール・プーチンはウクライナを侵略しなかった。

そこで、もしバイデンが、侵略のなかったことに気づいているなら、彼はそれを認めなかった。彼は一言も言わなかった。今日、彼は再びテレビジョンに戻り、我々に再び保証した——侵略がやってきつつある。

.....

【訳者注補足】 タッカー・カールソンの皮肉な談話は、もう少し続くが、これで彼の言いたいことがわかったと思う。彼の言っていることは、アメリカ人に対してだが、これは我々日本人にも、更に輪をかけ当てはまる：——目に見えない権力者たちや、その傀儡に対し、あたかも阻喪があってはならない貴人か何かのように、恭しくするのをやめよ。なぜなら、この者たちは、地上で最も墮落した、最も良心の欠けた、非人間的な者たちであり、もし彼らに阿るようなことをすれば、彼らは我々を与しやすしと軽蔑し、我々を支配して、勝ち誇ろうとするだろう。プーチンはそのことを、おそらく世界で一番よく知っている。ゼレンスキーも知っている。この者たちをからかうべきときには、からかうのが正しいやり方である。**オイ、みんなあわてろ、ロシアが攻めてきたぞ！**